

## 理学部附属 植物園のいきものたち 第30回 ケヤキとエノキの種子の行方

今回はニレ科の2種類の樹木、ケヤキとエノキをご紹介します。ケヤキもエノキも樹高20メートルを超える高木に成長し、理学部植物園内をはじめ京大構内の各地にあるので目にする機会も多い樹種です。

ケヤキは、ほうき状の樹形が美しく、街路樹にもよく利用される樹木です。ケヤキは、種子が風によって遠くに運ばれる風散布植物です。しかし、その運ばれ方が少し変わっています。普通、風で運ばれる種子には翼が付いています。カエデの翼やタンポポの綿毛がその例です。しかしケヤキの種子は直径3mmほどの硬い粒で、翼のような構造は見当たりません。じつはケヤキの種子は、枝ごと落ちるのです。(写真1:左側)枝に残った葉が風を受ける羽根の役割をして、枝ごと運ばれていきます。役目を終えた枯葉のリサイクルというべき、巧みな仕組みです。

エノキは、秋に直径5mmほどのオレンジ色の果実を実らせませす。(写真1:右側)エノキは、種子が鳥によって運ばれる鳥散布植物です。果実を口に入れてみるとほのかに甘い味で、なかから1粒の硬い種子が出てきます。ヒヨドリやメジロなどの鳥たちは果実を丸呑みにして食べ、なかの種子を糞に出します。鳥たちは種子の運び屋としての役割をしっかりと果たしているようです。街中で、道路脇のアスファルトの隙間からエノキの稚樹が伸びているのを目にすることもあります。

しかし、すべての鳥がエノキの種子を運んでくれるわけではありません。秋から冬にかけて園内を歩いていると、エノキの木の上から、パチパチと何かを割るような音が聞こえてくる場合があります。樹上で群れているのはイカルという鳥です。(写真2 撮影:梶田学)スズメとハトの中間くらいの大きさの、ずんぐりむっくりとした印象の野鳥です。イカルは太いくちばしを持っていて、種子の殻を割って中身を食うことができます。興味深いことに、イカルは他の鳥たちが好む甘い果肉の部分を食べないで捨ててしまいます。エノキの樹下に種子の殻や果肉の断片が散らばっていたら、まずイカルの仕業でしょう。種子を全く運ばないで破壊してしまうイカルは、エノキにとって「敵」にあたります。

植物園で観察していると、鳥と植物との関係はさまざまであることが理解できます。

撮影・解説 吉川徹朗(京都大学大学院農学研究科 森林生物学研究室 修士課程2年)  
写真2の撮影 梶田学



▲写真1



▲写真2